

句集

椿垣

大坪景章

しほさゐの

優しき日なり

椿垣

風に強い、ということとは、海からの強い力に対し、少しも屈せず美しい花を咲かせて、しかもその内側を守る役割を十分に果たしてくれる、ということである。房総の椿は「椿の花」「椿の木」ではない。房総を守る自然からの賜り物である。

〔あとがきより〕

「風」時代から

「万葉」主宰まで

「常住」に続く

二十年間の句業の集成

水取の焦げし杉葉を拾ひをり

石庭をむささびとべり春の夜

宮岡計次逝く

握手の手離さざりしよ桃の花

せんだんの花の盛りの空にごる

青梅は沈み青柿流れゆく

為朝の墓は藪蚊の巣でありし

まつしぐら瀧のしぶきへ岩燕

一本の白樺高き花野かな

一枚の桜紅葉が海に浮く

御前に栗落つ白山本地仏

立冬の日を吸ひ込み蟹の穴

鶺鴒の潜り鴨の浮寝を乱さずに

子狸に替はりてみた證誠寺

うぐひすや跣足踏み出す一遍像

着ぶくれの女取巻く氷室小屋

念仏を唱へ氷室に雪を詰む

震へつつ熊汁に舌焼きにける

雪詰の氷室に供ふ塩と米

水門を全開にして春立てり

雛流す男波女波を見定めて

竹生島

かがやきてくちなは枝を移けり

下闇に白蛇のごとく女消ゆ

先師を偲ぶ

木に上る魚の気色にとぶ鶺鴒かな

涼しさや金輪際より生れし島

へなへなと閻魔の前へ冬の雨

数へ日の柑子の黄まぶし風木舎

夫立ち妻膝をつく障子貼

おうおうの応へ二日の師匠かな

激論となる初春のコップ酒

年酒の名上じょう善ぜん如みずのごとし水とか

普天間より鬼餅来たる吊るさうぞ

妻の手に母の匂ひの灌仏会

新宿にて「風」の会

短夜の夢の欣一髪黒し

父の日のベルトがかくも長きとは

白南風やひらめのやうに行く女

草の葉に草より青ききりぎりす

若蘆の吸ふ吐くの息音立てて

散る桜走るばかりの能なしか

夢の金沢 五句

九十を越え産土の花の下

花びらの止まるところ決まりぬて

満開のさくら犀川浅野川

重なれる蝶や約束あるごとく

もやがかる医王戸室や花の奥

種となる虞美人草の哀れかな

あと三日わが病院のこの桜

退院の朝高だかと朴の花

万物を一瞬に消す大初日

さくらさくら白きさくらや地震の年

どれよりも高きは赤のチューリップ

父の日に白靴もらひ疲れたり

睡蓮は池のどこかを開けてゐる

うをのめに目玉二つや沖繩忌

熟れ棗落つるにまかせ風木舎

秋寒の灯明台に火を入れよ

雪
螢
胎
蔵
界
の
み
ほ
と
け
へ



イカロス選書

句集
大坪景章

発行 平成二十八年十月二十七日

著者 大坪景章

発行者 大山基利

発行所 株式会社 文學の森

〒一六九・〇〇七五

東京都新宿区高田馬場二・一・二 田島ビル八階

tel 03-5292-9188 fax 03-5292-9199

e-mail mori@bungak.com

ホームページ <http://www.bungak.com>

印刷・製本 竹田 登

©Keisyo Otsubo 2016, Printed in Japan

ISBN978-4-86438-595-4 C0092

落し・乱丁本はお取替えません。

著者略歴

大坪景章 (おおつぼ・けいしょう)

大正13年 金沢市生まれ

昭和22年 京都帝国大学法学部卒業

中日新聞社入社

昭和53年 新聞三社連合事務局長

昭和55年 「風」入会、沢木欣一・細見綾子に師事

昭和58年 「風」同人

平成3年 「風」45周年記念賞文章の都受賞

平成6年 「風」賞受賞

平成14年 「風」終刊

「万象」創刊発起人、万象作品選者

平成20年 「万象」主宰

句集「常住」、評論集「俳句は眼前にあり」

俳人協会評議員